

足許を見てごらん

丸山 勉

[聖書] ルツ記 2章 1～17 節

ナオミの夫エリメレクの一族には一人の有力な親戚がいて、その名をボアズといった。モアブの女ルツがナオミに、「畑に行ってみます。だれか厚意を示してくださる方の後ろで、落ち穂を拾わせてもらいます」と言うと、ナオミは、「わたしの娘よ、行っておいで」と言った。ルツは出かけて行き、刈り入れをする農夫たちの後について畑で落ち穂を拾ったが、そこはたまたまエリメレクの一族のボアズが所有する畑地であった。ボアズがベツレヘムからやって来て、農夫たちに、「主があなたたちと共におられますように」と言うと、彼らも、「主があなたを祝福してくださいますように」と言った。ボアズが農夫を監督している召し使いの一人に、そこの若い女は誰の娘かと聞いた。召し使いは答えた。「あの人は、モアブの野からナオミと一緒に戻ったモアブの娘です。『刈り入れをする人たちの後について麦束の間で落ち穂を拾い集めさせてください』と願い出て、朝から今までずっと立ち通しで働いておりましたが、今、小屋で一息入れているところです。」ボアズはルツに言った。「わたしの娘よ、よく聞きなさい。よその畑に落ち穂を拾いに行くことはない。ここから離れることなく、わたしのところの女たちと一緒にここにいなさい。刈り入れをする畑を確かめておいて、女たちについて行きなさい。若い者には邪魔をしないように命じておこう。喉が渴いたら、水がめの所へ行って、若い者がくんでおいた水を飲みなさい。」ルツは、顔を地につけ、ひれ伏して言った。「よそ者のわたしにこれほど目をかけてくださるとは。厚意を示してくださるのは、なぜですか。」ボアズは答えた。「主人が亡くなった後も、しゅうとめに尽くしたこと、両親と生まれ故郷を捨てて、全く見も知らぬ国に来たことなど、何もかも伝え聞いていました。どうか、主があなたの行いに豊かに報いてくださるように。イスラエルの神、主がその御翼のもとに逃れて来たあなたに十分に報いてくださるように。」ルツは言った。「わたしの主よ。どうぞこれからも厚意を示してくださいますように。あなたのはしための一人にも及ばぬこのわたしですのに、心に触れる言葉をかけていただいて、本当に慰められました。」食事のとき、ボアズはルツに声をかけた。「こちらに来て、パンを少し食べなさい、一切れずつ酢に浸して。」ルツが刈り入れをする農夫たちのそばに腰を下ろすと、ボアズは炒り麦をつかんで与えた。ルツは食べ、飽き足りて残すほどであった。ルツが腰を上げ、再び落ち穂を拾い始めようとする、ボアズは若者に命じた。「麦束の間でもあの娘には拾わせるがよい。止めてはならぬ。それだけでなく、刈り取った束から穂を抜いて落としておくのだ。あの娘がそれを拾うのをとがめてはならぬ。」ルツはこうして日が暮れるまで畑で落ち穂を拾い集めた。集めた穂を打って取れた大麦は一エファほどにもなった。

[序] 今日の時代とルツ記の時代

先日の台風 15 号は、今も、特に千葉県に住む人々に深刻な影響を与えているよ

うですね。もう一週間近くが経とうとしていますが、電気が通らない地域、水が絶たれたままになっている地域がまだまだあります。加えて通信の障害が発生したり、車のガソリン不足の問題、ごみや瓦礫処理についても問題化しています。本当に大変ですね。でも、私たちも他人事ではないのですよね、考えてみたら…。一日でも早く日常生活が取り戻されますように、また、大変な作業に追われている方々のご健康が守られますようにお祈りしたいと思います。

私たちは電気・水道・ガス・通信…、インフラが整備されている生活に慣れきっています。そして食料でさえも自分で手に入れるということは殆どなく、どこかの店で買うことによって生活を維持しています。そのために私たちはお金というものを必要としています。いい悪いという問題ではなく、私たちの日常がそのような仕組みになっているのです。

しかし、先週もお話しましたがけれども、当然ながら**旧約聖書のルツ記の時代**というものは、今日のようなインフラなどある筈もなく、**自然と人間が一体化しているような日常**でありました。そのことを前提としてルツ記を見ることは、もしかしたら大事なことなのではないかと思いました。この時代の私たちがどこか見失ってしまっていること、忘れがちなことがここには描かれているのではないかと思うのです。

[1] ベツレヘムで生き始めるナオミとルツ

先週と一緒に読んだルツ記 1 章の最後にこのように書かれていました。

「二人がベツレヘムに着いたのは、大麦の刈り入れの始まるころであった。」(1:22)

そして、今日の 2 章の最後の言葉は、このようになっています。

「ルツはこうして、大麦と小麦の刈り入れが終わるまで、ボアズのところで働く女たちから離れることなく落ち穂を拾った。」(2:23)

ルツのベツレヘムでの生活は、**大麦の刈り入れの始まるころ**に始まり、そして彼女は、**ボアズ**という人の畑地で、その麦の「落ち穂」を拾い続ける生活をその**大麦と小麦の刈り入れが終わるまで続けた**のです。17 節には、「日が暮れるまで畑で落ち穂を拾い集めた。」とあります。朝から、そして太陽が沈む夕暮れまでです。正に**自然と一体化した生活**ですね。けれども、それは“のどか”などと言うのではなく、むしろ貧しい外国人の、しかも女性にとっては**過酷なこと**だったと思います。しかし、これは、ルツが**選択した生き方**でもありました。

夫と息子たちを失った**義理の母ナオミ**が、嫁であるルツ、オルパに、私は故郷ベツレヘムに帰るが、あなたたちは自分たちの親族がいるモアブに留まりなさい、よく今まで一緒に生きてくれた、どうかこれからのあなたがたの生活に主が報い、憐れみを垂れて下さるように、さあ、お別れしましょう、と言いまして、その母の言葉にオルパは泣く泣く従うのですが、ルツの方は、「あなたを見捨て、あなたに背を向

けて帰れなどと、そんなひどいことを強いないでください。わたしは、あなたの行かれる所に行き／お泊まりになる所に泊まります。あなたの民はわたしの民／あなたの神はわたしの神。あなたの亡くなる所でわたしも死に／そこに葬られたいのです。」(1:15-17)と言いまして、足を踏み入れた事のない、外国であるユダのベツレヘムにナオミに従って入り、そこで新しく生きる決心をしたのです。それは、ある意味、古い自分との決別でもあったのではないのでしょうか。ルツは、この義理の母親が信じている「主」なる神様という方を私も信じて生きてゆきたい、ナオミのように生きてゆきたい、という強い思い、また憧れのようなものを感じていたのではないかと思います。

当時のユダの国では、外国人は神様の恵みから外れている者として見下げられていました。少なくとも、そのような差別意識があったのは確かだと思います。ですから、外国人のルツにとっては、どこか肩身の狭い思いや孤独な心を抱えていたに違いないと思います。…しかし、ルツ記を読んでいますと、そんなルツの屈折した思いとか、泣き言とか、不満とか、そのようなものは見て取れません。ここに描かれているのは、実に、人の心の厚意に依り頼み、それを喜び、感謝している、とてもしなやかで、また逞しい生活者の姿があるように思えるのです。その意味で、ルツ記というのは、本当に人間の心の素直さ、純朴さ、また人を受け入れ合う出会いも描かれている、美しい物語だと思います。

[2] ボアズとの「出会い」を与えて下さる神様

その美しさは、外国人の若い未亡人ルツと、**ボアズという男性**との出会いの描写において際立っていると思います。このボアズとは、ナオミの死んだ**夫エリメレクの親族**の一人で、広い土地も所有している有力者でありました。ルツは、ボアズ存在を知っていなかったようです。ただ、たまたま自分が、或る畑で農夫たちが大麦の刈り入れをするその背後で取りこぼされた大麦の穂を摘む「**落ち穂拾い**」をしていた、その畑がボアズの畑であったことを、後になってから知ったのです。

「落ち穂拾い」。それは、外国人や旅人、貧しい者にとっては生きていくことに直結する営みでした。当時の律法では、畑の所有者は、穂であろうと果実であろうと、全部を収穫するのではなく、それを貧しい者たちのために少しを残しておくという細やかな配慮があり、言ってみればその取りこぼしで生活をつなぐ人々がいたのです。彼らにとって、切実な「日ごとのパン（糧）」です。

自分の畑に毎日のようにやってくる若い外国人女性をボアズは気に止めるようになりました。そして召使にこのルツのことを聞きました。そしてボアズはルツに優しい言葉をかけるのです。「わたしの娘よ、よく聞きなさい。よその畑に落ち穂を拾いに行くことはない。ここから離れることなく、わたしのところの女たちと一緒にここにいなさい。刈り入れをする畑を確かめておいて、女たちについて行きなさい。若い者には邪魔をしないように命じておこう。喉が渴いたら、水がめの所へ行って、若い者がくんでおいた水

を飲みなさい。」——これにはルツ自身が驚きました。「よそ者のわたしにこれほど目をかけてくださるとは。厚意を示してくださるのは、なぜですか。」と言いました。

ボアズは、ルツに、あなたがベツレヘムに来た事情も聞きましたよ、ご主人も失い、姑に尽くされて来、見も知らぬ国に来られたのですね。どうか、主があなたの行いに豊かに報いてくださるように。イスラエルの神、主がその御翼のもとに逃れて来たあなたに十分に報いてくださるように、と言いました。

この言葉は、本当に慰め深くルツの心に留まったのですね。——「主がその御翼のもとに逃れて来たあなた」。あなたが今いるところは、他ならない、主の御翼のもとなのですよ、どうぞ安心なさい、という響き。この人は、ナオミさんが信じている「主」を信じている人だ！このことは、どんなにルツの心を潤し、生きる力になったことだろうか、と思います。

ボアズから食事まで与えられ、たらふく食べ、また沢山の大麦の束を背負って帰ってきたルツはナオミに報告します。19 節。「今日働かせてくださった方は名をボアズと言っておられました。」ナオミはたいそう喜び、主を讃えながら言います。「どうか、生きている人にも死んだ人にも慈しみを惜しまれない主が、その人を祝福してくださるように。」——このような出合いを与えて下さるとは、神様は確かに生きておられるのだ、私は夫も失い、跡継ぎもない。神様の恵みから漏れてしまったような私だと思っていたけれども、そうではなかった。神様は私たちに恥を見させられないどころか、本当に私たちを顧みていて下さっているのだ！ 主は私たちを祝福してくださっている！ この親戚ボアズとルツの出合いが何よりの証しだ！ 何と感謝なことか、そうナオミは思ったのだと思います。

そのナオミの言葉に、ルツも 神様のご計画が自分にも何か見えるような気がして、つましい生活であったに違いありませんが、心の中は、満たされた思いを持ちながら、その後の日もルツは、落ち穂拾いをしたのだと思います。23 節の言葉には、ルツの喜びのようなもの、また、自分のような者に注がれている主の恵みへの確信があるように思うのです。彼女は、言い方はおかしいかもしれませんが、まるで、神様の宝石のつぶを拾い集めるかのように、落ち穂拾いをしたのではないのでしょうか！ 私を生かす神様の恵みがこんなに足許に落ちこちているとは何と素敵なことか、と。

[3] シリア・フェニキアの女性と私たち

私は、この物語を改めて味わい、新約聖書の「シリア・フェニキアの女性」（マルコ 7 章 24～30 節）の物語を思い起しました。娘の病を癒して欲しいとイエス様に懇願したこのシリア・フェニキア出身の女性は、イエス様から「まず、子供たち（ユダヤ人の意）に十分に食べさせなければならない。子供たちのパンを取って、子犬にやっちはいけない」と斥けられたのです。しかし、この外国人女性、順番が違うと

さえ言われたこの女性は、それにも拘わらず、ひるまずに、しかも謙遜に「主よ、しかし、食卓の下の子犬も、子供のパン屑は頂きます」と求めて行ったのです。そして、主はこの女性の信仰を喜ばれたのです。そして、彼女の信仰を受け取り、娘さんに対してみわざをなされたと言うのです。

—いろいろな解釈が出来る聖書の物語だと思えます。ただ、私が思わされたことは、このシリア・フェニキアの女性も、モアブの女性ルツも、そして私たちもまた同じだということです。元はと言えば、神の契約の民ではなかった者たちです。私たちは皆、本来神様の恵みを頂く値打など無い者なのです。いや、実はユダヤ人でもそうです。ユダヤの民が神の契約の民とされたのは、ただ一方的な神様の憐れみに他なりません。最も弱く貧弱だから、神様は、この民から世界に救いのみわざを広げる為に選ばれたのです。私たちが神様の恵みを頂いているというのは、私たちにその価値が、資格があるからなのではありませんよね？本当にそうです。「私は神様の恵みを頂く資格がある」などといったら、「何も分かっていないね」と言われてしかるべきだと思います。いや、むしろ信仰生活をすればするほど、自分がいかに神様から遠い、恵みなど頂ける資格がないものだ、ということが分かってくるのではないのでしょうか？

「ペトロの手紙一」の中にこういう言葉があります。2:9～10 ですが、素晴らしい言葉です。——「しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。あなたがたは、『かつては神の民ではなかったが、今は神の民であり、憐れみを受けなかったが、今は憐れみを受けている』のです。」

ちょうどルツが、ボアズから、“何の遠慮もいらないから、私の畑で他の女たちに混じって、心ゆくまで落ち穂を拾いなさい、誰にも邪魔はさせません”と言われたように、私たちも今、主イエス・キリストの十字架に示された憐れみと愛のゆえに、この世界という大きな神様の畑の中で、恵みを頂きながら生きるように「招かれて」いるのだと思います。ユダヤ人も異邦人もありません。全ての人がです。イエス様はおっしゃいました。「天の父は、悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせて下さるからである」(マタイ 5:45) と。そして私たちに期待されていることは、「あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝える」ことなのです、私たちの体と生活を持って。

[結] 恵みを拾うひとになる

「足許を見てごらん」という題を付けさせて頂いたのですが、「ほら、足許を見てご

らん」という歌詞の歌もありましたけれども（キロロ『未来』）、本当に私たちの日常生活、神様は、私たちのためにあっちにもこっちにも、パン屑ではありませんけれども、**上からの恵み**をこぼして下さっているのではないのでしょうか！ 上を見上げることもいいですが、子どもの様にしゃがんで足許を見ることも発見に満ちているはずです。信仰生活とは、その恵みを拾って生きる行為だと思いますし、クリスチャンとは、**この恵みを落ち穂拾いのように拾うひと**のことなのではないかと私は思いました。ナオミも、ルツも、悲しみを抱えた女性であるにも拘らず、どこか明るいしなやかさを感じます。それは、心がどこと繋がっているか、ということなのだ、と教えられました。

最後に、長野県が生んだあの信仰詩人水野源三さんの「今日一日も」と言う短い詩（夏に書かれた詩なのでしょう）をお読みして祈りをささげたいと思います。

「今日一日も」

冷たい水のうまさに夏を感じ
新聞のにおいに朝を感じ

風鈴の音の涼しさに
夕暮れを感じ

かえるの聲はっきりして夜を感じ
今日一日も終わりぬ

一つ一つの事に
神様の恵みと愛を感じて

お祈り致します。